

ナガサキ・ユース代表団 2019 活動レポート

YOUTH REPORT vol.7

可能性を広げろ



PUSH THE BOUNDARY!

BEFORE DEPARTURE

出発前



「知識」と「学ぶ姿勢」が 身に着いた勉強会

高見すなお（長崎大学多文化社会学部 2 年）



昨年 12 月に任命されてから渡航前まで約 3 か月、20 回ほどの勉強会を行いました。NPT 会議に派遣されるにあたり、私達がそれぞれ興味のある分野を挙げていき、勉強会の内容を決めていきました。RECNA の先生方から NPT や各国政府の声明文、非核兵器地帯構想、中東情勢、世界史、原子力発電所の仕組み等について教えていただきました。また、外部から講師をお招きし、戦争体験や被爆体験、安全保障、市民運動等について学びました。講師の方々は常に私たちのどんな意見や質問にも耳を傾けてくださりました。自ら「知らないことを知ろうとする」ことが学ぶことの本当の意味だと思います。知識だけでなく自ら学ぶ姿勢を取ることが大切だと実感しました。

広島合宿一学び、感じる一

中山 穂香（長崎大学歯学部 2 年）



2 月に「ヒロシマとナガサキの違いを学ぶ」ことを目的として広島合宿を行いました。広島では広島市立大学の Jacobs 教授に "Global Hibakusha" という概念について講義をしていただき、世界中にヒバクシャがいることを学びました。また、広島の高校生と交流し、彼らの「平和」に対する考えを聞くことができました。

さらに、広島の実相を知るべく、広島平和記念資料館を見学したほか、被爆遺構を巡ったり、被爆者の方から直接お話を聞いたりしました。この合宿を通して、ヒロシマとナガサキそれぞれの将来に向けた課題を見出すとともに「怒りの広島、祈りの長崎」という表現があるように、被爆の歴史に対する考え方にも違いがあることが最も興味深い点でした。



ACTIVITIES IN NY

ニューヨークでの活動



国際機関から世界を見る

内橋寛二（長崎大学多文化社会学部 4年）

私たちは各々の興味関心から、国連本部の近くにある国際連合開発計画（UNDP）と国際連合児童基金（UNICEF）の2つの国際機関を訪問しました。UNDPではアフリカ開発を担当されている方からお話を聞きました。印象に残っていることは、「アフリカの人々は貧しくてかわいそうだから（私たちが”良い”と思う方法で）助けてあげよう、という姿勢で支援するのではなく、相手の立場に立ち、互いに十分に話し合った上で、”どのような方法”で支援を行うかを考えることが大切だ。」とおっしゃっていたことです。



これは核兵器廃絶を目指す上でも必要な考え方だと思います。”どのような方法”で核兵器をなくしていくべきでしょうか。相手の立場に立って、何をすべきかを考えなければいけないと感じました。



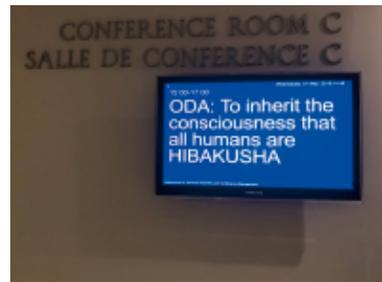
人類みなヒバクシャという意識を継承する

牟田麗（長崎大学多文化社会学部 2年）



「サイドイベント」とは NPT 会議と同時進行で NGO や政府関係者の誰もが主催できるイベントです。7 期生としての様々な学びを経て「人類皆ヒバクシャという意識を継承する」というテーマのもと発表しました。私たちはヒバクシャの定義を“広島・長崎で原爆投下の被害にあった人”、“核実験や原発事故の被害にあった人”、“核が存在している現代に生きる人”の3つとしました。

6名のメンバーが、被爆者の原爆体験や外国人被爆者の存在、原発事故による自主避難の経験、核兵器が存在する現代に生きる私たちのリスクについて発表しました。当日参加して下さった約60名の中の多くの方が私たちの提示したヒバクシャの定義に共感し、これからもっと多くの人に伝えてほしい、一緒に活動したいとおっしゃって下さいました。渡航前の約 4 か月間毎日のようにメンバー 6 人で話し合いぶつかり合いながら準備を進めたことで、私たちにしかできないサイドイベントを作り上げることができました。



その先に見据えるものは

中島大樹 (長崎大学多文化社会学部 4 年)



4月29日から5月10日にかけてアメリカ、ニューヨーク国連本部にて行われた2020NPT再検討会議第3回準備委員会の会議を傍聴しました。同会議では、核軍縮、核不拡散、原子力の平和利用について議論が行われました。とりわけ核軍縮ではアメリカやロシア、イラン等の国々の対立が見られ、今後の「核なき世界」の実現に向けて厳しい道のりとなることが予想されました。

しかしながら、一方でいくつかの国々からは2017年に採択された核兵器禁止条約への署名・批准への言及から、「核なき世界」へに向けた前進も見られました。またNGO(非政府組織)関係者からは今回の会議について来年の本会議に向けて最低限の準備が整った、という感想などが聞かれたため、来年に向けて明るい兆しも見えたように感じられました。来年の再検討会議も、「核なき世界」に向けた進展が見られるか、期待を持って注視したいと思います。



ナガサキ・ユースが政府と対話!?

矢野大輝 (長崎大学工学部 2 年)



私たちは各国政府代表の方に渡航前に連絡をとり、日本やアメリカ、スウェーデン、エジプト、ドイツ、オーストリア、オーストラリア、コロンビア、ニュージーランドの9か国の政府関係者の方々と話すことができました。

私たちは各々が会議で出された声明文や各国の核兵器廃絶への取り組み等について、疑問に思ったことやもっと知りたいと思ったことを政府の方に伺いました。中でも非核兵器国であるスウェーデン政府の方々は自分たちの活動に対して、熱心に耳を傾けて下さり有意義な交流ができました。また、核兵器国であるアメリカ政府との対話の際は、対話の内容は外部に漏らさないようにという指示のもと、とても緊張感のある対話が行われました。これらを通して、会議傍聴だけでは得られないような貴重な経験ができました。



会議では、各国の代表がステートメント(声明文)と呼ばれる自国の核問題に対する考え方を発表します。私たちを含めた各国の若者が協力し、若者としての声明文を会議場で発表することができました。具体的には日本、アメリカ、インド、ドイツ、カザフスタン、中国、メキシコ、マレーシア、ニュージーランド、ベトナムから来た若者が渡航前からオンラインで話し合いを重ね、作り上げた「私たちは国を超えて集まり、私たちの核兵器のない未来のために世界のリーダーに目を覚ましてほしい」というメッセージを世界に向けて発信しました。

国境を超えて自分たちの将来に向けて意見交換をし、現地で彼らと交流した時間は大変有意義なものでした。当日は会議で唯一発表後に拍手を受けるなど、国際社会における若者の重要性やその強いパワーを感じました。

国際会議で若者が 声明文を発表?!

永江早紀 (長崎大学多文化社会学部 4 年)

